

第48号

発行

群馬ホスピスケア研究会

責任者 土屋 徳 昭

事務局 高崎市北久保町10-9

(吉本宅)

☎・FAX 027 (353) 1341

e-mail ttn32hi253@mx9.ttcn.ne.jp

☎ 027 (323) 5824

e-mail SNB32318@nifty.com

印刷 ㈱ あさを社

高崎市衆町1854-59

☎ 027-327-1161

ねがい

いつでも どこでも ホスピスケアを!!

市民ホスピスセミナー 2001

2001. 10. 27 (土)

人間らしく生きる ~娘が難病になって — 安らかに命を支える —

お話 上原喜久司さん

自然とのかかわり

私は現在、前橋市で「あずさ動物病院」(病院名の由来は娘の名前です)を経営しています。東京農工大学を卒業して獣医師になりましたが、千葉県で臨床の研究をしているときに畜産の仕事と小動物の医療との間に葛藤がありました。最終的には小動物の医療は病気を診るというよりも、病気になった犬や猫と飼い主の方との間に優しい気持ちを橋渡ししてやるのが、いずれ周りの方々への思いやりにつながるであろうと分かってきて開業しようと変わってきました。

私自身はスポーツが、特にテニス、スキー、登山が大好きで、それに絵も好きで時々描いて遊んでいます。40才になったときに改めて緑の地球に出会ったことをとても嬉しく思いました。もっと緑の地球の中で遊んでいたい、遊んで買いたい、そう思いました。その辺からだんだん自然に対する思いが強くなってきました。

私の家族は娘を含めて3人ですが、その娘が元気なときは毎年秋になると家族で林にどんぐりを拾いに行きました。拾ったどんぐりを土に埋め、出た芽を畑に移して育てた後に森に返してやることを今でもやっています。今、前橋に住んでいますが緑が盆栽のように小さくなってきています。もっと大きな木が“もう10年たったよ”“100年たったよ”というような大きなス



ケールの時間がたった自然がまったく見当たりません。“水と緑と詩のまち”と書いていますが川を見れば水は汚く、街並みは大きな木を切って小さな木を植えて緑だといってごまかしています。東京のほうがはるかに緑が大きくて多いと思います。

話は変わりますが、ベットの医療というのはその当時はまだマイナーの世界で、金儲けになるというのが一般的な見方でしたが、私はベットの医療を通して飼い主の心の支えになればそのほうが周りの人への優しい気持ちにつなげていただけると確信しました。

娘の発病

横浜で半年ほど修行した後、前橋で開業しました。開業後4か月ほどは赤字つづきで大変でしたが、その後は黒字に転じ、家族も健康で充実した日々を過ごしていました。

そのような時、ある夜子供と一諸にふろに入りました。女の子ですが21世紀を生きる子なので、女だとか男だとか関係なく育て、自分の意見はきちんと主張するし、“私、女だから”と引っ込むような子供であって欲しくないと思っていました。学校で男の子を泣かせてきて謝りにいったり、いろいろなことがあった元気な子だったのですが、ふろから出て「お父さんおやすみ」と寝ました。翌朝、5時過ぎに2階がなにか騒々しいので上がってみると、娘が気持ちが悪いと言っていたらしく、妻が「気持ち悪いなら洗面所に行きなさい」とベッドから出したらしいのですが、なかなか下りて行かなくて階段の上でウロウロしていました。そのウロウロが壁を手探りするような状態なのでびっくりして娘の顔をつかまえて「あずさどうしたんだ！」と言ったら、「よく見えない！」と言うんです。「お父さんの顔が分かるか？」と言っても「分からない」と。それで、日赤病院が開くのを待って連れて行き、最初

は眼科で診察を受けたら「これは眼ではない、脳のトラブルではないか」と言われて神経内科に回されました。検査の結果、脳こうそくがおきているとのこと、小学校3年生なので驚きました。本人は目が見えないので気が動転しているし、親はもっと動転しています。その後、治療して行くなかでなかなか視力回復の気配がなく、医師からも回復の見込みが示されませんでした。これでは“見えないという状態で一生を送らねばならない”ということを受け止めなければならないか、など悩みながら入院治療を続けました。

それから約2週間後、病院に付き添っていた妻からすぐ来るように連絡があり、どうしたのかなと思って飛んで行ったら体温計のデジタル数字を娘が読んだのです。本当かなと「あずさもう一回読んでごらん」と何度も繰り返してみたのですが正しく読めたのです。これは嬉しくてなにが起こったのか分かりませんでした。それから時間と共に視力が回復して、医師からは視野狭窄があると言われていたのも意識されないほどに回復して元気になりました。

病気の再発

2度とそのようになって欲しくないと言いつつ、2年余の日が過ぎました。ある夜、11時過ぎに頭が痛いと言いだしたので、すぐに日赤病院の救急外来に連れて行くと即入院になりました。この時には人格が変わるほどの変化がみられ、一晩中「わあわあ……」と訳の分からないことを言ったり、親にでもお医者さんにでも顔を見ると唾を吐きかけたりするので妻と交替で付いていないと、何をするかどこへ行くか分からない状態になりました。さらに症状は進み「1+1はいくつ」も分からず、「あずさ自分の名前を言ってごらん」と言っても答えられないようになりました。

病状が安定したというので退院して自宅療養になりましたが、トイレに行こうとしても部屋のドアを開けた出口で立ち止まってしまうのです。頭の中でどっちに行けばよいのか分からないのです。「トイレはこちらだよ」などと教えているうちに少しずつ記憶に残るようになり、日常生活はなんとかできるようになりました。しかし、まだ家族が話す言葉がほとんど理解できないので紙に書いて読んでやるうちによく「分かった」と返事をするようになるなど、要するに脳のいろいろなところに障害がでてきていたようです。

そのようななかで検査を続けていましたが、病名がミトコンドリア脳症と分かりました。群馬大学病院



で遺伝子の検査をしましたがトラブルは見つからず、なぜこの子に起こったのか分からないと言うのが医師たちの見解でした。しかし、親としてはなんとか娘を治したいとアメリカ、ヨーロッパ、ドイツなどの知人を通して調べたけれど治療法がありません。その頃他にも同じような病気の子供が3人ほどいて、いずれの方も東京女子医大病院で治療されているとの情報がありました。私たちにも主治医からどうするかの話がありました。妻と相談の上、東京に行けば必ず治るといっていいし、生活も東京と前橋に分断されてしまう、また今は情報が入る時代なので群馬県で治療することに決めました。結果としてその3人の子供さん達は亡くなられてしまったのに私の娘はまだ生きていてくれる。何がどうなっているのか分かりません。

そのようなうちに、やはり元気になるとすごく嬉しいもので娘の体力がまだ十分でないうちから家族で動きまわったり、旅行をしたりしていろいろなことを体験させると同時に私達も家族であることを喜んでいました。

それから3年くらい経って、ちょっと気を抜いた時です。当時娘はミッションスクールの中学2年生でした。運動が禁止されていたので、友達が少なかったようですが、ある日5人もの子供さんが遊びに来てくれました。あずさは大変喜んで興奮気味にどたばたと遊んでいました。しばらく前から病気の再発がなかったので私達の頭から病気の心配はなくなっていたのですが、あの時もう少し早く気付いて飛び回ることを抑制していたら今が無かったのではと思うこともあります。夜になって娘が休んでから様子を見にいった妻が「少しおかしい」と言うのです。昼間あんなに元気だったのにと思いつつ日赤病院に連れて行きました。最初はなんとなく頭が痛いという程度で、約1週間は話もできたのに徐々に言動がおかしくなって最終的には意識障害、意識不明の状態になりました。そのとき「お父さんあずさの病気治してよ!!」と言われたのにどうすることもできず、悔しくて今でもその言葉が耳に残っています。

症状が悪化してもうまったく分からなくなり、何か月もの入院になりました。食事のとれないあずさの治療は腕の静脈からの栄養点滴だけでしたから、日に日に顔がこけて顔色が悪くなってきました。日頃妻は沢山の栄養点滴管でつながれて命を維持することに対して「私はいやだ。私が死ぬ時はしないで」と言っていて、医師にそのことを話したようで病院側もそれ以上



の処置はしなかったようです。それを私は知らずに「何でもっと栄養補給をしないの」と妻をいさめたりしましたが、娘は憔悴して、これでは命が危ないのではないかという感覚がありました。

親として心の葛藤

このように何度も障害を家族で乗り越えてきたつもりですが、病人本人の辛さはそれとして、私達にもやりたいことができないなど色々な制約を受けるようになったのです。そこから逃れたい、こんな現実はいやだと受入れを拒否する気持ちが出てきて、症状が悪化したときには、いっそのこと死んでくれたほうが良いと思うこともありました。最後に意識が無くなる前に「お母さん象さんが頭の中で暴れているみたい」と言っていたことは想像できないほどの大変な痛さだろうと思い、それほどの苦しみをしているなら死んだほうが良いのではないかと。

妻は日常のほとんどを娘に投入しているので、「お前の人生はどうするんだよ」と言ったこともあります。家族ですから娘のために色々なことをするのは当然ですが、妻にも人生があるし、私にも人生があると考えたときに、こんなに苦しんでいるならいっその死んじゃったほうが良いと思いました。でも、本当に娘が死ぬかも知れないと思ったとき、だらんとした手を握っても何の反応も無く紐を握っているような感じですが温もりがありました。その温もりを感じたとき、家族って生きているだけで意味があるとはじめて解りました。

そのとき俗に言う、目から鱗が落ちるというのでしょうか、自分では今までそれなりに頑張ってきたつもりではいましたが本物ではなかったのかと思いました。そこからそれまでは研究室や学会などに行きたい

という気持ちを断ち切って、妻と娘を支えて生きて行こうと気持ちが変わりました。そうなるから少しずつ自分なりに見えるようになりました。



在宅治療と転地療法の効果

半年近くの入院生活の後、病状は悪いなりに安定してきたので自宅に帰れるチャンスができました。しかし、日赤病院では往診ができないので開業医のO医師を主治医にお願いして自宅に連れてきました。

自宅に来ると少しはほっとしますが、娘は自分では食べることも、喋ることもできない、手足も動かない、まさに首の座らない大きな赤ちゃんです。それで、妻は自分のベッドと並べて24時間付き添うことになりました。これはまずいなと思ったのですが、付きっ切りの看病をするうちに妻がノイローゼになってしまいました。

気力を無くして自殺を考えている妻をなんとかしようと、那須に温泉付きの貸別荘があるのを探して出かけました。那須には美術館などが沢山あるので交替で観に行ったり、温泉で娘のリハビリを行ったり、車椅子で散歩に出かけたりしていくうちに妻が徐々に元気になり顔に表情ができました。

その中で転地療法が大切だと分かったので、そうした場所をつくろうということになりました。妻が気に入ってくれて、緑の森のあるところ、私たちの手の届くところなどいくつかの条件に合う場所を探した結果、旧軽井沢に適当な土地を見つけました。そして、一緒に建物を造ることを通して気持ちが前向きになったのみならず、四季を通して使えるようにしたので、いつでも行けるという気持ちを持っているだけで、すごくゆとりの出ることが分かりました。娘は意識が無いのですが、連れて行くと感じが少し違います。妻も精神的に安定してきて、それまでは介護しなくてはと

いう意識が頭を全部埋め尽くしていたのですが、さほど苦になら無くなってきたのが分かりました。

天命に安んじて人事を尽くせ

今回のテーマ「人間が人間らしく」とは何だろうと考えたとき、娘が病気になって涙が止らず眠れなくなったときに見たテレビの画面を思い出しました。それは交通事故で頸椎を骨折し、全身麻痺の状態になってすべての希望が閉ざされた大学生のことです。その学生はどこにも光が見つからない状況だったわけですが、僧侶の話の聴く機会があって「こんな自分でも生きている意味があるかもしれない」と思ったのです。僧侶の説法を聴いて色々やっけて行く中で、僧侶がその方に「天命に安んじて人事を尽くせ」と言われたそうです。天命とは「あなたが交通事故でそうなったことがあなたの天命であって、そのことを嘆くのではなくて、夜、満面が月の光りに照らされてまったく微動もしないような落ち着いた安らかな気持ちで自分の現実を受け止めなさい」ということのようなのです。その学生は、今は一戸建ての家を持ち、メイドさんを使って会社を経営しています。

私も時間の経過とともに現実を受け入れることができるようになって、娘を介護することで人としてどうしたら良いのかが少しずつ見えるようになってきた気がします。



**ボランティア
60名募集!!**

**第26回「死の臨床研究会」
年次大会in群馬**

2002/11/23・24

高崎（音楽センター・シティギャラリー他）

「死の臨床研究会」って？

Q：「ほとんどの人が知るわけないね。それって何なの？」

A：「この会は実に今から30年ほど前から、死という、人間にとって避けて通ることのできない現象に、医学だけでなく、心理学、哲学、宗教、社会学など、あらゆる分野からアプローチし、そこに科学的な視点に向けて考えて行こう、と発足した民間の研究団体です」

Q：「それで今、どんな活動してるんですか」

A：「日本における「終末期医療」や「ホスピス」に関する研究、臨床に初めて取り組んだ先進的な「会」で、ここに参加している多くの医療者はホスピスを作り、そこで理想的な終末期医療とは何かを常に考えながら仕事をしています。もちろん、一般の人でも誰もが、関心があり希望すれば入会することができます」

Q：「ボランティアはそこで何をやるのですか」

A：「会場設営・準備、案内、クロークなどです。二日間で延べ120名必要です。ボランティアの大会参加費は無料で、昼食は用意します」

当日プログラムの一部紹介

メインテーマ「生と死を超えて」

特別講演

(1)「生と死を超えて」

星野富弘（詩人）

(2)「WHO方式がん疼痛プログラムの歴史的背景と世界規模での普及活動」

武田文和（埼玉医科大学）

教育講演

(1)「末期患者への食べることの援助」

平野真澄（ピースハウス）

(2)「末期患者のQOLを高めるリハビリテーション」

仲正宏（淀川キリスト教病院）

(3)「緩和ケアと感情労働」

武井麻子（日赤看護大学）

(4)「呼吸困難に対する緩和治療のアルゴリズム」

斉藤龍生（西群馬病院）

市民シンポジウム 「あなたががんになったとき～ホスピスって何？」

群馬ホスピスケア研究会

桐生ホスピス研究会

申し込み方法・問い合わせ

群馬ホスピスケア研究会 電話 027-353-1341・027-323-5824

ボランティアにご希望の方は申込用紙にてお申し込みください。（住所・氏名・性別・年齢・連絡先電話（携帯）番号・希望日時をご記入ください。）

2001.11.18

わたしたちの未来をつくる

こすもすコンサート

今年（2001年）のコンサートは、11月18日（月）、すみれ幼稚園（高崎市汪木町）でピアノ三重奏とJ（ジェイ）・バンドの2組の演奏者をお願いしました。このコンサートは「こすもすの家」建設のためのチャリティーとして行なわれ、チケット代等の収益は、建設基金とさせていただきます。当日、70名ほどの観客が集まり、I部では、サンサーンスの「白鳥」や、バッハの「カノン」など、おなじみのクラシック曲を、ヴァイオリン、チェロ、ピアノのソロで、また三重奏で聴きました。第II部では、「明日に架ける橋」、「ヘッドライト・テールライト」、「竹田の子守歌」などのポピュラー曲の演奏に、Jバンドのオリジナル曲「Winter」「ほたる」「J」の演奏、それに西田さんの娘（アユミ）さんがゲスト出演し、「花」などを歌っていただきました。最後に皆で歌おうコーナーで、「見上げてごらん夜の星を」、「なごり雪」をJバンドの演奏で会場に集った人達皆で歌い散会しました。1時30分～4時まで、30分のティー・タイムをはさんでの2時間、時の経つのを忘れて楽しいひとときを過ごしました。



ピアノの三重奏を演奏する

ピアノ：横尾典子さん
ヴァイオリン：
原喜峰さん
チェロ：横尾武宜さん



「白鳥」を演奏する横尾夫妻（上）

「愛の喜び」を演奏する東さん（左）

野菜を提供して販売する南雲邦男さん（右）





J 作詞・作曲 西田 雅子

目を輝かせ 目を輝かせ
 目を光らせて緑の中を走り回る
 風を感じて 風を感じて
 風を切って緑の中を走り回る
 大好きな公園で 大好きなあの子と
 大好きな青い空の下で
 Happy day Happy time
 風を感じて 風を感じて
 風を切って緑の中を走り回る

もう日が暮れて 日が落ちてきて
 そろそろ帰るとママの呼ぶ声が
 帰りたくない 帰りたくないんだ
 散歩の後は淋しいお留守番
 一人ぼっちの時間は
 なぜか好きになれないよ
 しかられるのも覚悟で
 スリッパを かみかみ かみかみかみ……

目を輝かせ 目を輝かせ
 目を光らせて緑の中を走り回る
 風を感じて 風を感じて
 風を切って緑の中を走り回る

目を輝かせ 目を輝かせ
 緑の中の Happy day
 Happy time



Jバンドのリーダー西田さん(ピアノ)と
ウッドベースの早川さん(左)



ボーカルの森島さん

WINTER 作詞・作曲 西田 雅子

真っ白な雪が 都会に舞いおどる
 私の雫の思い 包み込むように
 足を止め 思わず
 雪空を見上げてみる
 今年の冬からは あなたは傍に居ない

白いキャンパスに 今の気持ちを描くとしたら
 ブルーの絵の具で 塗りつぶすだけ
 それでもいいんだね それでもいいよ
 それでもいいんだね
 いつか光を 探したくなるまで
 動き出せるまで
 感じたくなるまで

白いキャンパスに 今の気持ちを描くとしたら
 ブルーの絵の具で 塗りつぶすだけ
 それでもいいんだね それでもいいよ
 それでもいいんだね
 いつか光を 探したくなるまで
 動き出せるまで
 感じたくなるまで 感じたくなるまで



パーカッションの
鹿島ミカちゃん

賛助出演で「花」を熱
唱するアユミさん



西田さんの愛犬J(ジェイ)





まるで映画のスクリーンのように

葬列の車は、元職場の正面入り口ゲートから迂回、前庭を一周し葬儀場に向かいました。道の両側には、祝日にも拘わらずたくさんの警察官が整列し、弔礼してくださいました。私は、その荘厳な光景を、まるで映画のスクリーンを見るように呆然と見ていました。

夫の葬儀というより、何か第三者の葬列を見ているようでした。この違和感は、亡くなって、通夜の時から始まり、ずうーっとしばらくの間続きました。

初めての誕生日プレゼント

7月11日だというのにそれは暑い日でした。

いつものように遅い夕食の支度をしていると、玄関の開く音が聞えました。

出てみると、そこに主人がニコニコして立っていました。

「こんなに早くどうしたの？」

主人は黙って手に持った紙袋を私の目の前に差し出しました。

「エエ？」

私はそれを受け取ると、夕食の支度の手を休め、その袋を台所の食卓の上に置き、「どうしたの？こんなに早く？」と話しかけました。

夕食までその包みは食卓の上に放置されていましたが、食事の準備のため一時部屋の隅にかたづけました。いつものように晩酌の支度が整い、主人に声をかけました。くつろいだ姿の主人が、「開けて見るよ」とその袋を再び目の前に差し出しました。

「エエ、何？コレ？」

そこにはカメラとフィルムが10本も一緒に入っていました。

「どうしたの？」

「ウン、今日は誕生日だったな……」と、照れくさそうに言いました。

私はそう言われるまで、自分が今日誕生日だったことをすっかり忘れていました。しかも、こんなに早く帰ることなどめったにない主人が、誕生日だと言って、私が常日頃欲しいと思っていたカメラを、それも10本ものフィルム付きで買ってきてくれたことがにわかには信じられないのと、嬉しいのとで、何と言ったらよいか言葉も見つからず、それを手にとってワクワクしていました。

警察官という職業柄、結婚以来30年、明るい内に仕事から帰ってくることなど滅多にありませんでした。しかも、誕生日のプレゼントなどこれまで一度もありませんでした。

私たちの世代にはそのような習慣がなかったこと、仕事一途な人生を歩んできて、そのような心のゆとりも持てずにここまで来てしまったと改めて思いました。

私もこの間、誕生日のプレゼントを欲しいと思うことさえありませんでした。それが、生まれて初めて、主人から誕生祝いをもらったので、内心舞い上がっていました。

「写真上手に撮るにはどうすればいいの？」

「どんどん撮ることだよ」そのとき主人はそう言ってくれました。

「手の施しようがありません」

それから10日が過ぎたころ、「どうも体調が悪いから検査に行ってみよう……」と、官舎から少し離れた場所にある病院に行きました。診察と検査が一通り終わると、主人のいない隙間をぬって、付き添って行った私が医師に呼ばれました。

「膵臓がんの末期、手の施しようがありません」

「エエ？それで後どのくらい？」

「年月の単位ではありません。時間の単位です。家族の皆さんとの時間を大切に過ごされる方向で考えた方



が良いかと思えます。私は告知しない主義なので、何も言いません」と聞かされました。

主人はもう少し詳しい検査のため入院することになりました。

とりあえずの入院に必要な物を取りに家に戻ることも、家で品物をあちこち探し回ることも、自分の体が動いているように思えない。いったい、何のために何をしようとしているの、私は！

これをパニックというのだろうか。どうしたらいいのだろうか。恐ろしさで身のすくむ思いの中、何とか一通りの物を揃えて病院に戻りました。

一週間もすると病院は私たちに退院を促しました。しかし、家に戻ってどうしろと言うのだろうか、どうしたらいいのだろうかと思ひ、とても不安に感じました。

在宅療養への決意

婦長が、「在宅療養を支援する医院があるよ」と、電話番号を教えてくださいました。主人に話すと、「そこは俺の管轄だ。知っている。いやだ」と言いました。

私は主人には内緒で電話し、話を聞いてもらいました。

翌日すぐ、訪問看護婦のSさんが来てくれました。主人に知れるとまずいので、近くにある実家で話をしました。

訪問看護婦のSさんは、「退院している間だけ家族の方と協力して支援させていただきます」と、丁寧に主人に直接話してくれました。主人も話に納得し、在宅での時を過ごすことができました。

何度かの入退院がありました。家に戻っている間、Sさんの他、看護師のOさん、相談員のYさんと、在宅のスタッフが関わってくれました。初めは怪訝そうに接していたのが、いつか、訪問を楽しみに待つようになりました。とりわけ、看護師のOさんとは男同士、私とも話さなかったようなことまで心を開いて話をしました。

病状は日に日に緊迫していくのが分かり、私はうろたえながらもこの緊急事態を職場のみなさま、特に主人と同期だった方々に知らせなければと思いました。同期の仲間のみなさまはひとり一人思い出深い人たちで、その人たちにお会いいただくことは、私が主人にしてあげられる最後のプレゼントだと思いました。職場の上司の方々も良く理解してくださり、仕事の心配

がないように配慮したり、心温かい見舞いの訪問をいただきました。

在宅で支援いただいたYさんは病院にまで足を運んでくださいました。亡くなる5日前、「もう、あまり時間がありません。ご主人との時間を大切にしてください」と耳打ちしてくれました。私はそれ以降、見舞客の面会を一切断りました。二人の娘たちも会社を休んでずうっと三人、泊まり込みで主人と向き合いました。病院では決してこういう対応はなかったと後になって気が付きました。

初めて聞いた弱音

主人の意識がまだ明瞭な頃、「たとえどんなに時間がかかっても治りたい」と言いました。また、大部屋から個室へ移動が決まったとき、「やっぱり、俺は、ダメなんだな……」と、結婚以来一度も聞いたことのない主人の弱音を、初めて聞いた思いがしました。私は何も言えませんでした。

主人の父親も膵臓がんで亡くなっていたので、主人はほとんど自分の病気のことは承知していたと思えました。私があえて言う必要はありませんでした。

若い頃から、もしがんにになったら、私は告知して欲しいと家族に話していましたが、主人は「何も言ってくれな」と言っていたこともあり、私は主人に告知しませんでした。年・月単位の余命があるならまだしも、時間単位だという緊迫した中で、告知はいったいどんな意味があるのかと思ったからでした。だからじっと黙っていたのに、「告知しない」と言っていたはずの主治医が、こともあろうに亡くなる十日ほど前になって自ら主人に、「悪性の腫瘍です」と言ったのです。「なぜだ!!」、私は神経を疑いました。

コンサート会場でその医師の姿を見たという上の娘



は、家に帰るなり、「許されるならあの場であの医師を殴りたかった」と語気を荒げて言うのを聞き、ふだん冷静で物静かな娘の心をあんなに傷つけた心ない医師の言葉に改めて怒りがこみ上げました。

Yさんが教えてくれた日から5日後、9月13日、主人は亡くなり、下の娘の誕生日が告別式となりました。

仲良し時間

最後の病床で主人は、「宝物だ」と言ってとても大事にしていた娘達に自分の思いの丈をたくさん話して聞かせました。自分の人生は警察官として充実していたこと。警察官は自分の性格に合った好きで良い仕事だったこと。お母さんと結婚して幸せだったことなどを話してくれました。それはとても貴重な時間でした。

「この処置をすると危ないかも知れません」と医師に言われ、三度目の腹水を抜く処置をすると、意識のレベルが一段と落ちました。最後は幻覚が入り交じる中、時折、敬礼の仕草をしたりしながら、全部話し終えると息絶えました。

私は最後の期間、思い出したように、あの二か月前に私を驚かせた誕生日プレゼントのカメラで写真を撮りました。「どんどん撮ることだよ」と言った言葉が昨日のように蘇り、主人の生きている姿を少しでも多く残しておきたいと思いました。

大きな葬儀になる

私は亡くなる前から「葬儀」のことを心配して、義母から叱られました。「大きな葬儀になる、お父さんの葬儀らしく立派にしなくては」と考えていたので、泣いてはいられませんでした。私がひとたび泣いたらそのままグズグズになってしまうような気がしてじっと耐えました。感情的になってはいけません。警察官の妻として毅然とあらねばならないと自分に言い聞かせてきました。三回忌が巡ってきた今年の秋までそれは続きました。

今になってようやく、私はホッと肩の荷が下りたような気がします。それとともに、主人への新たな思いがフツフツと湧き出したように感じています。

定年退職目前に

私たちは、単身赴任の5年間を含め30年の結婚生活で、旅行らしい旅行もできませんでした。たまに出か

けても、いつ、呼び出しの電話が入るか気がかりが絶えずまとわりついていました。

85年、日航機の墜落事故の時など半月も帰って来ませんでした。久しぶりに戻ったと思ったら、三時間家に居ただけで再び出て行きました。成田闘争事件、赤軍派事件のころは若手の第一線で働いていた頃でした。とにかく、最近になって、正月から出て行くというのが主人の生活でした。

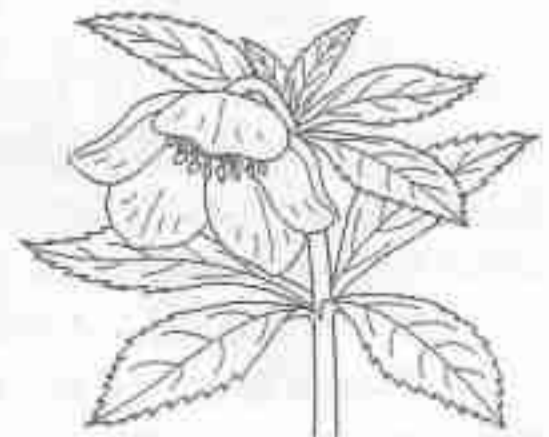
性格的にも、とにかく我慢強く、弱音を吐くと言うことは一度もありませんでした。同僚のみなさまの話も聞いても、もっぱら、「竹を割ったようなまっすぐでさっぱりした性格」という評判でした。



ようやく、定年退職が目の前に迫り、これからのことを話し始めていました。「パスポートを取ろう！手始めに車を買い換え、小旅行をしよう！」その矢先の突然の出来事でした。

私は、家のことは子育てを含めて、しっかり守るという習性が訓練され、ある意味ではそうすることに自信がありました。しかし、それは、主人が私の半身としてしっかり支え、生きていたからなのだと分かりました。私はこの人を通して社会を知り、他人を理解し、育てられてきた。その人が亡くなってしまった。今、半身を失った私は、全てに自信を無くし、フワフワした綿菓子のようになっていました。

「分かち合いの会」に参加して

群馬ホスピスケア研究会が主宰する死別体験の「分かち合いの会」に参加するようになりました。そこには、私と同じ頃奥様を亡くされたKさんが毎月参加されています。私は、その方の様子を見ながら、そこに自分の姿を映して見えています。その方が2年経った今、希望の光を見つけたように安み始めた姿を見ると、私まで嬉しくなってくるのを感じています。「死別の悲嘆は共鳴する」と、その会に出ていて実感しています。それを生かしたボランティアができればいいなと、最近まで目の前に置けなかった主人の大きく引き伸ばした写真の前で感謝の乾杯をしながら思い始めているところです。




 2002市民ホスピス・セミナーのご案内
 

半円の闇 (生きる意味を考える)

関 アツ子さん (信州諏訪ノ歌人) 講演会

躰道跡の半円の闇にももの言いたげな桜のひと枝のびで揺れている
 「おふくろ手首を切る力もうない」と子の自殺願望に幾度泣いた
 掻き集めた手術代の見返りは植物人間 覚悟していても重い
 身代わりになってやれない命ひとつ山の端にあずけ 天を睨む

「半円」は躰道の半円であろうが、宇宙、あの世とこの世、人生の半分、光と闇とも言えないだろうか。
 朝鮮から引き揚げ、我が子と夫を早くに亡くした彼女の激動の半生を、うた(短歌)と魂が語る。

日時 : 2002/3/30 (土) 午後1:30~3:30
 場所 : 群馬県社会福祉総合センター201号室
 会費 : 500円

「いい本だ。何度も胸を打たれた」

山崎章郎氏 (東京小金井・聖ヨハネホスピスケア研究所長) も絶賛!!

群馬ホスピスケア研究会 編
 (定価 1300円+税)

『続・悲しみ、そして愛』

死に直面したときのみちしるべ

群馬ホスピスケア研究会が、また、本を作った。

*「私たちは死者や過去からしか学ぶことはできない。この本は、本会の10年間の活動の軌跡と到達点でもあり、それぞれの立場で死を看取った人たちの死者への鎮魂、追悼誌であるとともに、死と向き合いながら生を考え、生を生きる人たちの、未来への希望、賛歌でもある。」(まえがきより)

*「妻を亡くした時、夫を亡くしたとき~配偶者との死別後、どう生きるか、どのように再生への道をたどったのか、また「再婚」という問題についてはどのように考え、行動したのかなどについて本音の話し合いをしました。……」(座談会より)

寄付 ありがとうございます

片山信子、佐藤房子、三上文夫、住谷宗七、上原喜久司、Jバンド、すみれ幼稚園、南雲邦男、蓬萊靖雄
 (物品の提供者) 深野八重子、大塚利雄、原国一、萩原美智子、紀文、中部名店街、小平享、八木洋子、藤井京世、吉田紀代、佐藤博、萩原八千代、土屋徳昭、土屋富子、石原理恵、石田孝子、土屋大路、メガネマーチ、「柳」、小笠原美佐子、蜂巣須美子、「からおけステーション」(2001.9~2002.1)

- ★ 群馬ホスピス研究会通常活動資金のための寄付
郵便振替 番号/00560-4-5287
名称/群馬ホスピスケア研究会
- ★ 看取りの家(こすもすの家)建設基金のための寄付
郵便振替 番号/00170-9-47945
名称/群馬ホスピスケア研究会
「建設基金」

死別体験者の悲嘆を受け止める 開かれた会

「分かち合いの会」は毎月実施されています。

1997年から継続。

日時：毎月第2日曜日、午後2時~4時。

場所：群馬社会福祉総合センター

(新前橋駅前) 201号室。

どなたでも、予約なしで自由に参加できます。もちろん無料です。

死別による悲しみや苦しみを誰かに聞いてもらいたい……話したい……

同じような悲嘆に苦しむ人の話を聞いて参考にしたい……。

編集後記

年末からお正月にかけて慌ただしく過ごしたので、友人の誘いもあって伊豆の温泉に出かけました。水平線のかなたから周りを紅く染めながらゆっくり昇ってくる太陽を眺め、不思議な感動を覚えました。ゆったりした時間の大切さを味わって帰ってすぐに、貧血でダウンしました。一人暮らしの心細さで友人に助けを求め、ありがたさが身に沁みました。生活の乱れを指摘されて、今年は忙しさに振り回されないようにしようと思いました。(Ta)

今回から編集のお手伝いをする事になったルーキーです。妻との死別からまもなく3年になり、漸く自分だけのことから少しは脱却できそうになってきました。ただ編集のようなことには携わったことがないので、関係の方々に迷惑をかけないことだけを心掛けて行くつもりです。

それにしてもこの“ホス研”ってふしぎな会ですね。最初は分かち合いの会でかかわりを持ちはじめたのですが、特に入会をすすめられたこともなく、また、入らねばというような義務感もなかったのに、気が付いたらいつの間にか会の活動にひきこまれていました。これは悲しみを乗り越えながら、やさしい気持ちで接しようとしている人々の集まりだからなのでしょう。(Su)

二年越しの宿題がもうじきできる。本会第2弾目の大型刊行物、「続・悲しみ、そして愛」が2月に誕生する。この本は、1990年、勢いで作った前刊の「悲しみ

そして愛」とはひと味も二味も違うかなーという感慨がある。取りかかって間もなく、白銀美子さんという、最も頼りにしていたスタッフが亡くなった。正直、「もうダメか」と内心諦めが心をよぎった。だが、間もなく、「白銀さんのために作らねば」という思いがムクムクと湧いた。

人は人の死に絶望し、生きる力を無くす。しかし、その人の死がまた、困難だと思っていた壁を超え、生きる力をも与えてくれる。人の死とは不思議な力を持つものだと、この歳をして改めて知らされる。(No)

新しい年を迎えて早1ヶ月が経とうとしている。今年は、2月に2年越し待望の本が刊行される運びになった。昨年4月、ともに本の編集に携って下さっていた白銀さんが急逝され、一時は、みな力を落とし、挫折しそうになった。それでも、昨年後半、気持ちを立直し、1人の編集委員が、パソコンに向かって文章を打ち続けた。本をページスタイルにする作業で、腱鞘炎になってしまった。270ページになった。今、最後の文章校正。もうすぐ、新しい本が、生まれる。生みの苦しみは、もう終わる。

この“ねがい”は、昨年12月発行予定だったが、大変遅れてしまった。心より申し訳なくお詫びしたい。今号の編集委員に、強力なニューフェース登場。ホス研は人使いが荒いと言われそう？(To)

